

於ては極めて変化に乏しい。即ちこれ等臓器に現れる KES の増減は一般にその個体のうけた障碍の程度に比例すると言ふことが出来る。

(擧筆するに臨み終始御懇篤な御指導と御校閲の勞を賜つた恩師浜崎教授並に那須助教授に対し万腔の感謝を捧げます)

文 献

- 1) 平野：皮膚科紀要. **12** ; 343. 1928
- 2) 子安：ルエス. **4** ; 165. 1929—1930
- 3) Rieckenberg : Zeitschr. f. Imm. **26** ; 53. 1917
- 4) 柳川：皮膚科紀要. **12** ; 401. 1928
- 5) 柳川：皮膚科紀要. **13** ; 193, 213, 407. 1929
- 6) 子安：皮膚科紀要. **16** ; 240, 359, 519. 1930
- 7) 子安：ルエス. **4** ; 256. 1930
- 8-a) 山本：皮膚科紀要. **20** ; 496. 1932
- 8-b) 山本：皮膚科紀要. **21** ; 384. 1933
- 8-c) 山本：皮膚科紀要. **23** ; 438. 1934
- 8-d) Yamamoto : Acta Dermat. **19**; 1. 1932.
- 9) 子安：皮膚科紀要. **17** ; 79. 1931
- 10) 本田：皮膚科紀要. **12**; 257. 1928
- 11) 加藤：皮膚科紀要. **17** ; 189. 1931
- 12) 那須, 大西 : 第464回岡山医学会にて発表1951
- 13) Jungeblut : Zeitschr. f. Hyg. u. Inf. **107** ; 357. 1927
- 14) Kritschewski, Rubiustein : Zeitschr. f. Imm. **62** ; 420. 1929
- 15) 晋 : 京城医專紀要. **3** ; 85. 1933
- 16) 天見 : 福岡医大雑誌. **23** ; 114. 1930
- 17-a) Buschke, Króo : Klin. Wochenschr. **80** ; 2470. 1922
- 17-b) Buschke, Króo : Klin. Wochenschr. **13** ; 580. 1923
- 18) 市川, 武田 : 浜崎教授宛の私信による. (東京病理集談会, 於昭和医大, 昭和27年7月発表)

兵庫縣家島郡島内家島本島の精神的遺傳負荷の研究

第 一 篇

精 神 疾 患 一 斉 調 査

岡山大学医学部精神病学教室 (前主任 林道倫教授 ; 現主任 藤原高司教授)

長 尾、 茂

[昭和27年5月10日受稿]

既に私は昭和18年9月, 精神神経学雑誌第47巻第9号に, 厚生科学研究所故荻野了博士と共に, 近親婚地域の精神的遺傳負荷の研究として, 兵庫縣家島群島内坊勢島に就ての調査結果を報告しておいた。同報告にも誌しておいた通り, 坊勢島は従同胞婚率10.5%で明らかに近親婚地域の特徴を示していた。ところが, 家島本島のそれは4.2%程度で, この比率は本邦平均頻度4.8%(川上理一博士)に比して寧ろ低く, 決して近親婚地域とは見

られない。その上, 以下述べるように, 坊勢島と家島本島では民勢学上にも相当の差違があるのである。

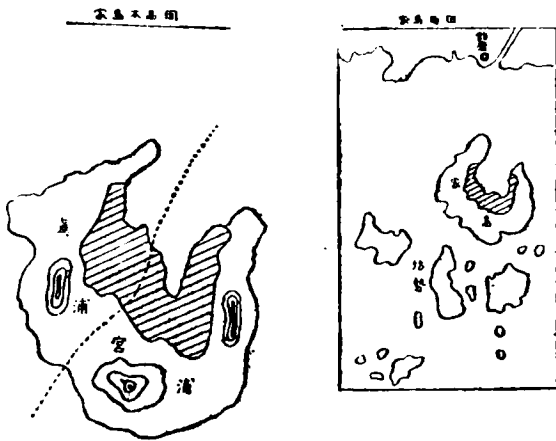
坊勢島の報告に次いで, 隣島たるこの家島本島の調査は早晩行はれなければならないところであつたが, 諸般の事情で遷延今日に至つた。しかしながら, こうした事情は却つて次のような点に於て私に幸したように思う。その第一は, 精神疾患の一斉調査が, この数年日本各地で行はれた結果, 比較すべき資料

が豊富になつたことである。第二に、私は数年来本調査に挾掌し、親しく各家庭を訪問し資料の蒐集に勉めたのである。幸にして、私は家島本島に開業している身であり、島内事情に就ては、充分知悉していると思うし、町役場吏員、学校職員、寺の僧侶、古老等とも充分な連絡を保ち得た。この点に関し他の一斉調査の如く短時日に行われたものに比して調査洩れの批難を避け得るだらうと思う。

I. 島 誌

家島群島とは、播磨灘に散在する大小四十数個の島々から成る一小群島名である。その中の家島本島は周囲約14軒を算する本群島中最大の島で、本土の飾磨港と南方に約18軒を隔てゝいる（第1図）

第 1 図



行政区分は兵庫県に属し、附近の坊勢島を含む 2、3 の隣接島を合せて町制が布かれているが、住民の大部分は家島本島の真浦、宮浦の 2 部落と、坊勢島部落の 3 部落に分散しているのである。興味あることは、これらの各部落毎に夫々特有な風俗、習慣、発音が存していることである。これは各部落民がその由来を異にしているからだとされている。

家島なる名称の起源に就ては、播磨風土記に「人民作家而居之故号家島」とあり、※万葉集にもこの島に就ての歌が 2、3 載つているようだから、可成り古い時代から土民が住んでいたと思はれる。

現在各部落民の由来に就ては、播磨風土記の家島記に、「陽成天皇の元慶 7 年の春、叡山西塔実相覚円僧都学席の論より事起り遂に播州家島に配布せらる」とある。この覚円僧都が配流されたのは、前報告にも記して置いた如く、現在の家島本島でなく、実は坊勢島であつた。当時、佐々木景綱の弟高島秀景は一党を引具して覚円僧都に従つて来島した。ところが、これら一党は後に至り挙げて家島本島宮浦に移住したのである。現在に於ても宮浦には高島姓を名乗る者が多い所以である。だから覚円僧都、高島秀景一統の子孫は、家島本島宮浦に居住し、坊勢島民は覚円僧都移住以前から居住していた土民の子孫である。又、真浦の住民はずつと後になつて播州網干方面から移住して来た者達の子孫であると言われている。このように、坊勢、真浦、宮浦部落は夫々住民が由緒を異にしていて、従つて、住民の性格、言語、職業にも夫々に異色が見られる。坊勢島に就ては、前報告でその大梗を述べておいたから、こゝでは真浦、宮浦部落を比較しておこう。宮浦は以上のように由緒ある子孫の住地である上に、徳川時代には姫路藩の代官が居住していた。従つて諸事それにならつた故でもあろうか。同部落民は一般に礼儀正しく口上手であるが、その反面言動に表裏があり、陰険である。金銭の上でも甚だこまかいところがある。ところが真浦の人々は、これと全く逆で口下手で素朴、表裏なく、金銭上にも中々鷹揚である。職業は漁業を主としているのは両部落に共通だが、真浦部落民は機帆船運送業に従い、宮浦

※ 円比真人笠麻呂筑紫国に下りし時作る

家島は名にこそありけれ海原を
わが恋ひきつる妹あらなくに。
鳩のなづさひゆけば家島は
雲居に見えぬわか想へる心和ぐやと、

部落民は釣船によると云うようにその規模に於て甚だしく相違している。

I. 住民の年齢構成

昭和25年9月30日現在に於ける住民の年

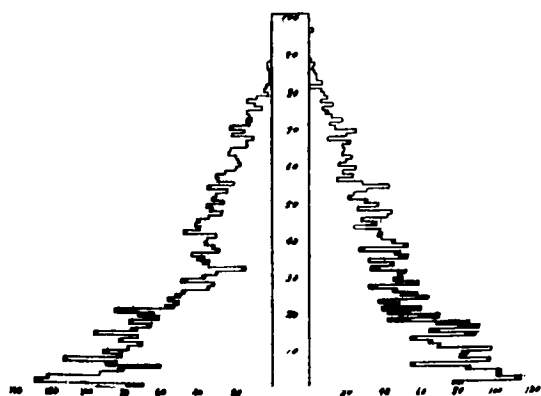
令構成を第1表と第2図に示しておく。

第1表に示す如く、家島本島人口は、男3340、女3263、計6603で男が77人多い。部落別に見ると、真浦は男1891、女1835、計3726、男、女の差は56で、宮浦は男1449、

第 1 表

| 年 令 | 宮 浦 | | | 真 浦 | | | 家 島 本 島 | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|-------|-------|
| | ♂ | ♀ | ♂+♀ | ♂ | ♀ | ♂+♀ | ♂ | ♀ | ♂+♀ |
| 0~4 | 203 | 192 | 395 | 207 | 199 | 406 | 410 | 391 | 801 |
| 5~9 | 181 | 165 | 346 | 236 | 232 | 468 | 417 | 397 | 814 |
| 10~14 | 142 | 170 | 312 | 247 | 198 | 445 | 389 | 368 | 757 |
| 15~19 | 152 | 135 | 287 | 217 | 178 | 395 | 369 | 313 | 682 |
| 20~24 | 116 | 93 | 209 | 177 | 124 | 301 | 293 | 219 | 510 |
| 25~29 | 114 | 97 | 211 | 103 | 117 | 220 | 217 | 214 | 431 |
| 30~34 | 76 | 90 | 166 | 81 | 115 | 196 | 157 | 205 | 362 |
| 35~39 | 67 | 90 | 157 | 106 | 128 | 234 | 173 | 218 | 391 |
| 40~44 | 84 | 76 | 160 | 107 | 96 | 203 | 191 | 172 | 363 |
| 45~49 | 66 | 82 | 148 | 99 | 95 | 194 | 165 | 177 | 342 |
| 50~54 | 64 | 59 | 123 | 80 | 90 | 170 | 144 | 149 | 293 |
| 55~59 | 56 | 48 | 104 | 67 | 63 | 130 | 123 | 111 | 234 |
| 60~64 | 46 | 43 | 89 | 53 | 53 | 106 | 99 | 96 | 195 |
| 65~69 | 32 | 34 | 66 | 40 | 60 | 100 | 72 | 94 | 166 |
| 70~74 | 23 | 26 | 49 | 46 | 38 | 84 | 69 | 64 | 133 |
| 75~79 | 20 | 18 | 38 | 17 | 26 | 43 | 37 | 44 | 81 |
| 80~84 | 5 | 3 | 8 | 5 | 19 | 24 | 10 | 22 | 32 |
| 85~89 | 2 | 6 | 8 | 3 | 3 | 6 | 5 | 9 | 14 |
| 90~96 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 2 | 2 |
| 0~96 | 1,449 | 1,428 | 2,877 | 1,891 | 1,835 | 3,726 | 3,340 | 3,263 | 6,603 |

第2図 家島本島住民の年齢構成 (斜線は島外在住者)



女1428、計2877で男、女の差は21である。そして真浦人口は本島人口の50.6%、宮浦は49.4%を占めているから、本島人口はこの2部落によつて略等しく折半されていると

言える。

第2図に示した年齢構成図に於て、青年層の低下を認めるが、これはそう著しいものではない。試に内村等が八丈島、三宅島で調査した同二島在住の20~49才迄の青年層は、夫々、31.38%、32.1%であつたが、家島本島では、同年令層総数2,399人で、住民の36.3%に当る。尤もこの数字は津川等の調べた大都市に於ける45.53%と比較すれば低率ではあるが、秋元等が離島と大都市の中間性格を持つとして調査の対象とした小諸町の36.6%に匹敵する値である。

II. 人口動態

(イ). 家島本島外在住者を第2表に示しておく。

第 2 表

| 年 令 | 真 浦 | | | 宮 浦 | | | 家 島 本 島 | | |
|-------|-----|-----|-----|-----|----|-----|---------|-----|-----|
| | ♂ | ♀ | ♂+♀ | ♂ | ♀ | ♂+♀ | ♂ | ♀ | ♂+♀ |
| 0~4 | 10 | 7 | 17 | 5 | 4 | 9 | 15 | 11 | 26 |
| 5~9 | 11 | 10 | 21 | 4 | 1 | 5 | 15 | 11 | 26 |
| 10~14 | 8 | 10 | 18 | 2 | 1 | 3 | 10 | 11 | 21 |
| 15~19 | 10 | 31 | 41 | 6 | 21 | 27 | 16 | 52 | 68 |
| 20~24 | 15 | 25 | 40 | 15 | 28 | 43 | 30 | 53 | 83 |
| 25~29 | 6 | 15 | 21 | 3 | 11 | 14 | 9 | 26 | 35 |
| 30~34 | 4 | 7 | 11 | 3 | 3 | 6 | 7 | 10 | 17 |
| 35~39 | 3 | 9 | 12 | 5 | 3 | 8 | 8 | 12 | 20 |
| 40~44 | 0 | 3 | 3 | 2 | 1 | 3 | 2 | 4 | 6 |
| 45~49 | 2 | 0 | 2 | 1 | 1 | 2 | 3 | 1 | 4 |
| 50~54 | 1 | 1 | 2 | 2 | 1 | 3 | 3 | 2 | 5 |
| 55~59 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 60~64 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 65~69 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 |
| 70~74 | 2 | 1 | 3 | 2 | 0 | 2 | 4 | 1 | 5 |
| 計 | 72 | 119 | 191 | 50 | 76 | 126 | 122 | 195 | 317 |

即ち、男 122、女 195、計 317 名の離島者があるが、これらは一斉調査には含まれていない。島外在住は 15~29 才に多く、特に女に多い。

(ロ)、出生、死亡、人口増加。

本島の出生率、死亡率は第 3 表に示す如くである。昭和 20 年の人口減少を境として (-8.8) 21 年には 1.5、22 年には 23.5、23、

第 3 表

| 年 度 | 出生率 | 死亡率 | 人口増加率 |
|-------|------|------|--------|
| 昭和 17 | 39.1 | 16.1 | 23.0 |
| 18 | 38.3 | 16.1 | 22.2 |
| 19 | 37.0 | 20.6 | 16.4 |
| 20 | 27.3 | 36.1 | (-8.8) |
| 21 | 37.6 | 36.1 | 1.5 |
| 22 | 53.3 | 29.8 | 23.5 |
| 23 | 54.1 | 19.2 | 34.9 |
| 24 | 44.6 | 12.7 | 31.9 |

24 年には夫々 34.9、31.9 と急激な上昇を示しているのが注目される所見である。この所見は、一方に於て戦時中の食糧事情による栄養障害や、戦死によつたものであり、他方青年の出征、徴用による出生率の低下によるものであらう。

(ハ) 乳幼児死亡率

10 才未満の乳幼児の死亡率は第 4 表に示した通りである。これも漸次減少して来ている。

第 4 表

| | |
|---------|-------|
| 昭和 21 年 | 0.64% |
| “ 22 年 | 0.63% |
| “ 23 年 | 0.43% |
| “ 24 年 | 0.39% |

IV. 住民の職業構成及び社会層

秋元・津川等の調査との比較に便のため、同氏等によつて採用された方式に従い、住民の職業構成及び社会層を表示すれば第 5 表の如くなる。この表でも分る通り、真浦では 66.5% と云う大部分が船舶所有者と船員で占められているのに対して、宮浦は小規模漁業が 58.4% と云う高率を占めているのである。

V. 住民の血族結婚頻度

従同胞婚頻度を第 6 表として掲げておく。従同胞婚頻度は、真浦では 3.7%、宮浦では 4.8%、平均 4.2% で、我国一般従同胞婚頻

第 5 表
職 業 構 成

社 会 層

| | 官教 公職 吏員 | 商工業 | | 農 業 | | 漁 業 | | 雇労働 傭人 | 船所有 船者 | 船 員 | 其の 他 | 上 中 下 | | | 関係数 | |
|----|----------------|-----|-----|-----|-----|------|------|-----------|-----------|--------|---------|-------|-----|------|-----|------|
| | | 独立 | 非独立 | 独立 | 非独立 | 独立 | 非独立 | | | | | I | II | III | | IV |
| 真浦 | 実数 29 | 71 | 32 | 46 | | 42 | 84 | 6 | 141 | 524 | 24 | 20 | 255 | 624 | 100 | 999 |
| | % 2.9 | 7.1 | 3.2 | 4.6 | | 4.2 | 8.4 | 0.6 | 14.1 | 52.4 | 2.4 | | | | | |
| 宮浦 | 実数 38 | 54 | 12 | 23 | | 303 | 264 | 2 | 21 | 227 | 25 | 10 | 200 | 539 | 120 | 969 |
| | % 3.9 | 5.5 | 1.2 | 2.3 | | 31.2 | 27.2 | 0.2 | 2.1 | 23.4 | 2.5 | | | | | |
| 全体 | 実数 67 | 125 | 44 | 69 | | 345 | 348 | 8 | 162 | 751 | 49 | 30 | 455 | 1163 | 220 | 1968 |
| | % 3.4 | 6.3 | 2.2 | 3.5 | | 17.5 | 17.6 | 0.4 | 8.2 | 38.1 | 2.5 | | | | | |

第 6 表

| 部 落 別 | 婚姻数 | 従 同 胞 婚 | |
|-------|------|---------|------|
| | | 実 数 | % |
| 真 浦 | 935 | 35 | 3.7% |
| 宮 浦 | 751 | 36 | 4.8 |
| 計 | 1686 | 71 | 4.2 |

度の 4.8% に匹敵する。従つて両地域共に血族血婚地域とは見られない。この点前報告の坊勢と著しく異なる点である。

Ⅳ. 現存精神神経病者数

一斉調査によつて見出された精神神経疾患者を一覽表として第 7 表に掲げる。

第 7 表

| 病 名 | 真 浦 | | | 宮 浦 | | | 計 | | | |
|--------|-----|----|-----|-----|----|-----|----|----|-----|------|
| | ♂ | ♀ | ♂+♀ | ♂ | ♀ | ♂+♀ | ♂ | ♀ | ♂+♀ | % |
| 精神分裂病 | 1 | 7 | 8 | 7 | 6 | 13 | 8 | 13 | 21 | 0.31 |
| 躁鬱病 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.03 |
| 真正癲癇 | 4 | 4 | 8 | 4 | 2 | 6 | 8 | 6 | 14 | 0.21 |
| 精神病質 | 6 | 3 | 9 | 4 | 1 | 5 | 10 | 4 | 14 | 0.21 |
| 精神薄弱 | 10 | 7 | 17 | 10 | 18 | 28 | 20 | 25 | 45 | 0.68 |
| 先天性聾啞 | 2 | 1 | 3 | 1 | 0 | 1 | 3 | 1 | 4 | 0.06 |
| 進行性筋萎縮 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0.01 |
| 外因性精神病 | 4 | 2 | 6 | 0 | 0 | 0 | 4 | 2 | 6 | 0.09 |
| 計 | 27 | 26 | 53 | 27 | 27 | 54 | 54 | 53 | 107 | 0.55 |

即ち、精神分裂病、真浦 8、宮浦 13、計 21。躁鬱病、真浦 2、宮浦 0、計 2。真正癲癇、真浦 8、宮浦 6、計 14。精神病質、真浦 9、宮浦 5、計 14。精神薄弱、真浦 17、宮浦 28、計 45。先天聾啞、真浦 3、宮浦 1、計 4。進行性筋萎縮が宮浦に 1、進行麻痺を含む外因性精神病が真浦に 6 で、総数真浦 53、宮浦に 54、全体で 107 名が発見された。これらのうち、狭義の精神病としての精神分裂病、躁鬱病、真性癲癇は 37 名で、全住民に対する割合は 0.55% である。

これを今までに報告された 2, 3 の結果と比

較すると第 8 表の如くなる。

第 8 表

| 調査地域 | 現住人口 | 内因性 精神病数 | 頻 度 |
|------------------|-------|-------------|------|
| 八 丈 島 (内村その他) | 8,313 | 57 | 0.68 |
| 三 宅 島 (内村その他) | 5,286 | 48 | 0.91 |
| 東京市池袋 (津川その他) | 2,712 | 33 | 1.22 |
| 小 諸 (秋元その他) | 5,207 | 56 | 1.08 |
| 坊 勢 | 1,775 | 13 | 0.97 |
| 家 島 | 6,603 | 37 | 0.55 |

これで見ると内因性精神病患者の人口に対する存在率としては、家島は従来のどの地域よりも低い。とは云え、これは概括的に見た上だけの相違であるから、実際の頻度は、疾患別に補正を行わなければならないであらう。

以下主要精神病の各個に就て、簡単な症例報告をなすと共に、その補正頻度を Weinberg の簡便法によつて計算してみよう。

A. 精神分裂病

精神分裂病と診断したのは、真浦では男1, 女7, 宮浦では男7, 女6で総数21名である。今その補正頻度を計算してみると、発病危険域を16~40才として、真浦では0.51, 宮浦では1.03, 家島本島全体では0.78となる。これを既に調査済みの各地域との比較値を掲げると第9表の如くである。この表によ

第 9 表

| 調査地域 | 係数 (危険域 16-40才) | 患者数 | 補正頻度 % |
|-----------------|-----------------------|-----|-----------|
| 八丈島 (内村其他) | 3508.0 | 32 | 0.91 |
| 三宅島 (内村其他) | 2199.5 | 14 | 0.64 |
| 東京市池袋 (津川其他) | 1221.5 | 6 | 0.49 |
| 小諸 (秋元其他) | 2210.0 | 11 | 0.50 |
| 五家荘 (向笠其他) | 1898.5 | 14 | 0.74 |
| 村岡村 | 712.0 | 7 | 0.98 |
| 坊勢 | 755.5 | 4 | 0.52 |
| 真浦 | 1582.0 | 8 | 0.51 |
| 宮浦 | 1259.5 | 13 | 1.03 |
| 家島本島 | 2841.5 | 21 | 0.78 |

ると、家島本島は、八丈島と三宅島の中間に位する。真浦は小諸の0.50に匹敵するが、宮浦だけをみれば、八丈島及び村岡村のそれを僅かではあるが上廻り、わが国既調査地域中の最高を示している。このことは宮浦部落に精神分裂病の一家系が存在していることによるものと思われる。(同家系に就いては別の論文で詳しく述べるつもりである)。次ぎに分裂病者各人に就いて簡単な病歴を述べよう。

真浦部落

1. 本〇と〇。明治12年生。女。

30才の頃離縁となり、その頃から精神に異常が現われた。怒り易く、妄想、幻覚があり、常に独語している。時には畠にも出るが、他家の作物をよく盗む、慢性型である。

2. 磯〇い〇。明治36年生。女。

第1例の姪である。20年前離縁となつている。数回の前行発作があつたようだが、その点不詳。昭和19年、緘黙・拒絶・幻聴・被窃盗妄想・昏迷状で岡山医科大学精神科に入院、軽快して退院、帰宅後再発したが、カルチアゾール療法により軽快した。とはいえ現在も尚軽い昏迷状にある。

3. 寺〇さ〇。明治37年生。女。

30才頃発病、行動が常同的・衝動的である。同じ道路を何回となく往還し、時々合掌して拜む恰好をする。心臓がなくなつている等という心気妄想を持つ。実母はヒステリー性格、二男は奇人、祖母は自殺をした。

4. 北〇ち〇え。明治38年生。女。

20才頃発病、当時は他人から色気狂と云われていた通り色情興奮があつた。その後次第に緘黙・昏迷状となり、道を歩くのも俯向いて通る。弟は傷害罪を犯し、祖父も激し易い人だつた。従弟も激し易く酒乱の癖がある。

5. 小〇き〇。明治44年生。女。

昭和22年頃発病。小児様爽快でよく喋る。思路減裂がある。岡山医科大学精神科に入院して軽快退院し、現在家事の手伝位は可能である。父、兄、弟も変人である。

6. 沢〇さ〇子。昭和2年生。女。

昭和22年婚姻問題があつたが、その頃から「うちが悪かつたんや」という様な罪業念慮があり、感情浅薄で泣いているかと思うと、流行歌を唄つているといった調子である。一步も外出せず家の中に居る。因にこの患者の家系には精神病患者多く、後述する宮浦部落の一精神病家系の一員であり、患者の婚約者も同じ家系の者で、これ亦その後精神異常を来している。結婚は私の薦めにより中止してい

る。

7. 畑○賢○, 昭和4年生, 男.

昭和25年1月発病, 結核恐怖, 不眠, 被害念慮(医者が注射して殺そうとしている)等がある。時に映画説明の真似をして終日喋っていることもある。従姉に分裂病者があつた。実父, 伯父, 伯母, 従兄も激し易い性である。

8. 中○花○, 昭和12年生, 女.

5年程以前から憂鬱になつていたが, 昭和25年8月頃から, 人が自分の顔を見て笑っている等というような関係念慮を懐くようになった。履物を片々に履いて歩いたり, 跳足で歩き履物を海に捨てたりするような街奇的なところもある。電撃療法により軽快している。

宮浦部落

9. 山○し○え., 明治45年生, 女.

昭和16年産後発病, 昏迷状で寡黙。商売をしているが, 家人に品物を売らさない。甥に分裂病者がある, 兄は好争性格人であつたが戦死した。子供に神経質の者がある。

10. 山○う○子, 昭和5年生, 女.

被害念慮・幻聴が主である。今までに数回の軽快, 再発を繰返している。従姉に癲癇者がある。

11. 大○政○エ○, 明治30年生, 男.

無為・緘黙・不関性である。宮浦分裂病家系の一人である。

12. 広○か○子, 大正14年生, 女.

17才発病, 興奮, 昏迷を繰返していた。加古川脳病院に入院寛解し現在は結婚している。母はヒステリー性格人である。

13. 橋○辰○, 大正12年生, 男.

前記第6例の婚約者だつた。「自分が信ぜられない」「他人が信ぜられない」等と興奮していた。約1ヶ月で寛解。分裂病家系の一人。

14. 中○元○, 明治39年生, 男.

外出徘徊し, 知らない家に屢々出向き色々のことを喋っていた。10年位前より寛解しているようである。病中は, 自分と釣合のとれる

ような大家の娘と結婚したいと云つていたが, 未だ独身である。分裂病家系の一人。

15. 中○か○, 大正12年生, 女.

接枝分裂病である。生来の低格と街奇行為昏迷が主である。分裂病家系の1人。

16. 田○儀○エ○, 明治41年生, 男.

発病は昭和16年, 著しい興奮があつて, 家の内外を跳び廻つていた。Cardiazol 痙攣療法で寛解。兄は魯鈍。

17. 三○幸○郎, 明治40年生, 男.

20才頃発病, 色情念慮が旺盛で, 猥褻な言辭を弄していた。2年位で自然寛解して, 25才頃より小学校教員をしているが, 甚だ社交性を缺く。兄も分裂病で死亡している。

18. 梅○明○, 明治13年生, 男.

昭和23年頃より時々被害念慮を起し何物かを恐怖しているような態度になる。1ヶ月位で発作は鎮静する。平生は著しい残忍性が目立つ。第8例の甥である。

19. 島○芳○, 大正8年生, 男.

香川県小豆島の産, 家系の詳細は不明。昭和25年11月頃より, 外出徘徊, 言語錯亂, 誇大念慮がある。

20. 中○よ○の, 大正11年生, 女.

昏迷・不関・情意鈍麻がある。時に激昂する。分裂病家系の一員。

21. 山○幸○, 昭和3年生, 女.

20才の時発病, 部屋の隅に茫乎としている。時々啼泣していることもあつた。4ヶ月後寛解。母方の祖母は分裂病; 父は自殺。

B. 躁鬱病

躁鬱病は真浦に2例だけで, 宮浦には発見されなかつた。これから計算した補正頻度は危険域21~50才として真浦0.15%, 宮浦0%, 家島全体として0.09%となる。既調査地域の補正頻度との比較を第10表として掲げる。

この表で分る通り家島の躁鬱病の頻度は他地域のそれに比して低い部類にいる。のみならず, 後で述べるように, 躁鬱病者の1名は淡路島から近年移往して来たものだから, これを除外すれば結局1名に過ぎない。その補

第 10 表

| 調査地域 | 関係数 (危険域 21~50才) | 患者数 | 補正頻度 % |
|-------|------------------------|-----|-----------|
| 八丈島 | 2844.0 | 8 | 0.28 |
| 三宅島 | 1746.5 | 10 | 0.57 |
| 東京市池袋 | 881.0 | 2 | 0.23 |
| 小諸 | 1718.0 | 15 | 0.87 |
| 五家荘 | 1472.5 | 0 | 0 |
| 村岡村 | 639.0 | 2 | 0.31 |
| 坊勢 | 672.5 | 1 | 0.14 |
| 眞浦 | 1301.0 | 2 | 0.15 |
| 宮浦 | 927.5 | 0 | 0 |
| 家島本島 | 2228.5 | 2 | 0.09 |

正頻度は眞浦0.08%, 宮浦で0%, 島全体としては0.05%になる。患者2名の病歴を次に記しておく。

1. 宗○の○, 明治6年生, 女。

女であるが, 若い時は酒をよく飲んでいて, 軽躁状態発作が時々あり, 気に入らぬことがあれば夫を殴りつけるようなことが屢々であった。最近10年間は発作はないが, 一般に快活, 多弁である。息子が最近詐欺罪に問われている。これも社交的な男である。淡路島から移住してきた女で家系の詳細は不詳である。

2. 柴○リ○, 明治10年生, 女。

5年程前から1~2ヶ月間憂鬱となり, 家人とも他人とも話さず床に就いている。食事は普通, この期間を過ぎると起き出し, 甚だ朗かになり頻りに喋る。歌を唄っていることもある。こういう躁鬱両状態の反覆を続けている。

C. 眞正癲癇。

眞正癲癇は, 眞浦の男4, 女4, 計8, 宮浦, 男4, 女2, 合計6, 従つて家島本島全体として, 男8, 女6, 合計14である。

補正頻度は危険域5~30才として眞浦0.33%, 宮浦0.34%, 家島本島全体としては0.34%である。即ち, 本島の癲癇頻度は第11表に示した既調査地に比して高くはない。特に坊勢に於ける0.89%に比すれば遙かに低いことは興味を惹かれる事実である。同じ町で地域

第 11 表

| 調査地域 | 関係数 (危険域 5~30才) | 患者数 | 補正頻度 % |
|--------|-----------------------|-----|-----------|
| 八丈島 | 5065.0 | 5 | 0.10 |
| 三宅島 | 3254.0 | 14 | 0.43 |
| 東京市池袋 | 1697.5 | 6 | 0.35 |
| 小諸 | 3281.5 | 13 | 0.40 |
| 五家荘その他 | 2745.0 | 11 | 0.29 |
| 村岡村 | 1218.5 | 2 | 0.16 |
| 坊勢 | 1234.5 | 11 | 0.89 |
| 眞浦 | 2364.0 | 8 | 0.33 |
| 宮浦 | 1782.0 | 6 | 0.34 |
| 家島本島 | 4146.0 | 14 | 0.34 |

によりかくの如き大差のあるのは, 矢張り坊勢に於ける癲癇負因の集積を語るものであらう。前論文に於ける私達の見解は正しかつたと思う。次に症例の概略を記しておく。

眞浦

1. 由○源○, 明治35年生, 男。

2. 由○慎○, 昭和3年生, 男。

3. 由○正○, 昭和11年生, 男。

1は2, 3兄弟の父である。1は若い頃は発作は頻発していたが最近は余り起らない。2, 3は月に2, 3回宛発作がある。Aleviatinを服用している間は発作は減ずる。

4. 管○甚○, 大正13年生, 男。

5. 柴○い○子, 大正元年生, 女。

4, 5は従姉弟の関係。何れも毎日小発作があり, 月に4~5回の大発作があり, 朦朧状態になることもある。癲癇痴呆の状である。

6. 山○し○子, 明治43年生, 女。

精神薄弱者でもある。大発作も頻繁に来る。

7. 細○き○の, 明治44年生, 女。

発作回数少なく, 精神的にも著変なし。

8. 河○き○え, 大正5年生, 女。

発作回数少なく, 精神的にも著変なし。

宮浦

9. 井○嘉○, 昭和18年生, 男。

精神薄弱を合併している。

10. 小田○助○, 昭和8年生, 男。

11. 村○清○, 大正15年生, 女。

12. 山○順○郎, 昭和9年生, 男。

13. 安○己○助, 大正6年生, 男.

14. 吉○こ○つ, 大正2年生, 女.

以上何れも発作回数少なく, 精神的にも著変なし。(10~14)

D. 精神病質

一斉調査に於ける精神病質, 精神薄弱の診断の困難は, 調査者の齊しく認めるところである。が, 幸にして私はこの点に於ては甚だ有利な立場にあつたと思う。私一家は数代前からこの町内に住んでいるものであり, 私も十有余年本町内に開業し毎日患者の診療に従っているから, 町内各家庭の人々のことに就いては知悉しているし, その上, 役場吏員, 学校教師とも密接な関係を保ちつゝ調査に当り得たのだから, 調査洩れは極く少ないと思つてよいと思う。こうして私が精神病質人と診断し得た者は真浦, 男6, 女3, 計9. 宮浦, 男10, 女4, 計14であつた。症例を示せば次の通りである。

真 浦

1. 河○義○, 大正8年生, 男. 興奮人である。激し易く, 好争性, 傷害の前科がある。

2. 本○音○, 明治11年生, 男. 極端な自己中心者で, 刺戟性人物。

3. 本○勇○, 明治45年生, 男. 興奮人, 傷害の前科がある。

4. 岡○善○, 明治24年生, 男. 興奮人。

5. 三○久○郎, 明治44年生, 男. 循環病質人, 窃盗の前科がある。

6. 石○勇○, 大正4年生, 男. 狂信性, ヒステリー性格人。

7. 石○ふ○, 明治33年生, 女. ヒステリー性格, 第6例の母親。

8. 出○き○子, 明治35年生, 女. ヒステリー性格。

9. 斉○し○, 明治12年生, 女. 抑鬱性。

宮 浦

10. 安○鉄○, 明治18年生, 男. 分裂病質人。

11. 山○一○, 明治43年生, 男. 興奮人。

12. 大○勝○, 明治7年生. 男. 分裂病質

人。

13. 福○義○, 明治28年生, 女. 興奮人。

14. 古○修, 昭和10年生, 男. 抑鬱性. /

以上によつて部落別の補正頻度は, 危険域11才以上として, 真浦0.32%, 宮浦の0.24%, 家島本島全体に於て0.28%となる。これを既調査地域のそれに比較すれば, 第12表の如くなる。この結果は小諸と同じ位の頻度となる。尤も精神病質なるものは精神薄弱と同じく, 資料の選び方により著しく異なる筈で, 私の結果を直ちに他の結果と比較するのは無理だらう。従つてこゝでは数値を掲げるに止めて, これ以上の詮索は止めたい。

第 12 表

| 調査地域 | 関係数 (11才以上) | 患者数 | 補正頻度 % |
|---------|----------------|-----|-----------|
| 八 丈 島 | 5981 | 3 | 0.05 |
| 三 宅 島 | 3727 | 62 | 1.61 |
| 東京市池袋 | 2207 | 23 | 1.04 |
| 小 諸 | 3648 | 13 | 0.36 |
| 真 浦 | 2745 | 9 | 0.32 |
| 宮 浦 | 2056 | 5 | 0.24 |
| 家 島 本 島 | 4801 | 14 | 0.28 |

E. 精神薄弱.

精神病質と同様, 精神薄弱も亦一般一斉調査では診断が困難であるが, この点に於ても前述の如き有利な立場にある私は比較的診断の正鵠を期し得たと思う。こうして検査した精神薄弱者は第13表の如くである。このう

第 13 表

| | 白痴・癡愚 | | | 魯 鈍 | | | 計 |
|------|-------|----|-----|-----|----|-----|----|
| | 男 | 女 | 男+女 | 男 | 女 | 男+女 | |
| 真 浦 | 5 | 6 | 11 | 5 | 1 | 6 | 17 |
| 宮 浦 | 6 | 7 | 13 | 4 | 11 | 15 | 28 |
| 家島本島 | 11 | 13 | 24 | 9 | 12 | 21 | 45 |

ち注目すべき家系として, 高○丑○一家がある。同人は癡愚者であり, その長女も癡愚者である。この両人の父子姦により出生した子供が6人であるが, その何れも魯鈍である。そのうち4名が現存している。その他にも母が癡愚で子供6人共癡愚者なる一家系と, 兄

弟2人共癡愚者，兄妹3人共魯鈍なるもの，母と子二人魯鈍なるもの，母と娘の魯鈍なるものの家系がある。

精神薄弱に対する補正頻度を既調査地区のそれと比較することは，精神病質と同じく余り意味がないと思うが，こゝでも参考のため第14表として掲げておく。

第 14 表

| 調査地域 | 関係数 (11才以上) | 患者数 | 補正頻度 |
|-------|----------------|---------|-------------|
| 八 丈 島 | 5981 | 5 | 0.08 |
| 三 宅 島 | 3727 | 117 | 3.13 |
| 東京市池袋 | 2207 | 26 | 1.18 |
| 小 諸 | 3648 | 52 | 1.42 |
| 眞 浦 | 2745 | 11 (17) | 0.40 (0.62) |
| 宮 浦 | 2056 | 13 (28) | 0.63 (1.10) |
| 家島本島 | 4801 | 24 (45) | 0.49 (0.94) |

(括弧内は魯鈍を含む)

私の調査区域では，癡愚，白痴は眞浦で0.40%，宮浦で0.63%，家島本島全体としては0.49%，若し魯鈍を加えるなら，眞浦0.62%，宮浦で1.40%，家島本島全体としては，0.94%となる。即ち，宮浦は眞浦に比して著しく高い頻度が注目される。

F. 進行麻痺

進行麻痺は眞浦に2名が発見されたのみである。1名は55才の女，他は63才の男で何れも治療により治癒している。他地域並みの頻度である(第15表参照)。

第 15 表

| 調査地域 | 関係数 (危険域 31~50才) | 患者数 | 補正頻度 % |
|--------|------------------------|-----|-----------|
| 八 丈 島 | 2375.5 | 3 | 0.13 |
| 三 宅 島 | 1503.0 | 0 | 0 |
| 東京市池袋 | 615.5 | 2 | 0.33 |
| 小 諸 | 1416.5 | 1 | 0.07 |
| 五家莊その他 | 1202.0 | 3 | 0.17 |
| 村 岡 村 | 468.5 | 1 | 0.21 |
| 眞 浦 | 1050.5 | 2 | 0.19 |
| 宮 浦 | 764.0 | 0 | 0 |
| 家島本島 | 1814.5 | 2 | 0.11 |

G. 先天性聾啞者

先天性聾啞者が眞浦に3名，宮浦に1名あつた。

H. 進行性筋萎縮

宮浦に1名の進行性筋萎縮があつた。

I. 外因性精神病

腸チフス後の精神薄弱状態の者2名，脳性小児麻痺並に精神薄弱，脳炎後の性格異常者各1名がある。何れも眞浦部落で発見されたものである。

Ⅶ. 總括と考察

1. 兵庫県家島群島家島町は坊勢島にある坊勢部落と家島本島にある眞浦，宮浦部落の3部落からなつている。

本報告は眞浦，宮浦部落の精神疾患一斉調査結果の記述であるが，既に昭和18年報告しておいた坊勢部落のそれとの比較を含んでいる。

2. 眞浦，宮浦，坊勢部落は同一町内の地理的区劃の差異と云うに止まらない。各住民の間には，歴史的に習俗的に可成り截然たる区別が存する。

3. 家島本島に於ける部落別主要精神病補正頻度と坊勢のそれを一括表示すれば第16表の如くである。

4. 本表に見られる如く，3部落間には次のような相違がある。

(イ)，分裂病は眞浦0.51%，坊勢0.52%で略等しく，宮浦だけ1.03%となつている。すなはち宮浦は眞浦，坊勢の約倍である。眞浦，坊勢の値は本邦他地域に比して低目であるが，宮浦は本邦中最高の値を示している。この事実は前述の如く宮浦に於ける一犬分裂病家系の存することにもよるであらう。しかしながら，宮浦に於けるこうした分裂病の高頻度が単に分裂病家系の存在だけによるのであろうか。他の宮浦住民の間にも分裂病負因の浸潤があるのではなからうか。この点の決定には穿刺法等による家系調査が必要となる。詳細な家系調査は目下材料を蒐集中で何れ将来発表の機会があると思うが，大體の見

第 16 表

| 部落別 | 分裂病 危険域 (16~40才) | | 躁鬱病 危険域 (21~50才) | | 癲癇 危険域 (5~30才) | | 精神病質 11才以上 | | 精神薄弱 癡愚・白癡(魯鈍を含む) (11才以上) | | 進行麻痺 危険域 (31~50才) | | | |
|-----|------------------------|------------------|------------------------|------------------|----------------------|------------------|---------------|----------------|---------------------------------|----------------|-------------------------|----------------|---|------------------|
| | 実 数 | 補正頻度 (関係数) | 実 数 | 補正頻度 (関係数) | 実 数 | 補正頻度 (関係数) | 実 数 | 補正頻度 (関係数) | 実 数 | 補正頻度 (関係数) | 実 数 | 補正頻度 (関係数) | | |
| 宮浦 | 13 | 1.03 (1259.5) | 0 | 0 (927.5) | 6 | 0.34 (1782.0) | 5 | 0.24 (2056) | 13 | 0.63 (2056) | 28 | 1.4 (2056) | 0 | 0 (764.0) |
| 真浦 | 8 | 0.51 (1582.0) | 2 | 0.15 (1301) | 8 | 0.33 (2364.0) | 9 | 0.32 (2745) | 11 | 0.40 (2745) | 17 | 0.62 (2745) | 2 | 0.19 (1050.5) |
| 家本島 | 21 | 0.78 (2841.5) | 2 | 0.09 (2228.5) | 14 | 0.34 (4146.0) | 14 | 0.28 (4801) | 24 | 0.49 (4801) | 45 | 0.94 (4801) | 2 | 0.11 (1814.5) |
| 坊勢 | 4 | 0.52 (755.5) | 1 | 0.14 (672.5) | 11 | 0.89 (1234.5) | | | | | | | | |

当付けをするために、31才より50才迄の精神健康者を宮浦から22名、真浦から26名選び、その家系表を作製して計算してみると、次のような結果が得られる。即ち第17、18表の如くである。

宮浦の発端者22名の家系のうち、父母の同胞の中に分裂病患者4名、従同胞中に2名が発

見された。今その補正頻度を計算してみると、発端者の父母の同胞では、患者4、関係数100、補正頻度4.0%となる。発端者の従同胞では患者2、関係数143.5、補正頻度1.39%となる。

ところが真浦では発端者26名、患者は父母の同胞に1、従同胞に2、同胞に1、同胞の子に

第 17 表 家 島 町 宮 浦

| 年 令 | 発端者 | | 両 親 | | 子 | | 同 胞 | | 同胞の子 | | 父母の同胞 | | 従同胞 | | 患 者 |
|-------|-----|---|-----|----|----|----|-----|----|------|----|----------|----------|-----|-----|---------------------------------|
| | 男 | 女 | 父 | 母 | 男 | 女 | 男 | 女 | 甥 | 姪 | 伯父 叔父 | 伯母 叔母 | 男 | 女 | |
| 0才~5才 | | | | | 17 | 14 | 11 | 9 | 14 | 37 | 5 | 3 | 14 | 17 | |
| 6~10 | | | | | 12 | 9 | 1 | | 8 | 7 | 1 | | 15 | 11 | |
| 11~15 | | | | | 7 | 3 | 2 | 6 | 6 | 6 | 1 | | 17 | 20 | |
| 16~20 | | | | | 2 | 3 | 9 | 3 | 4 | 3 | 4 | 1 | 28 | 19 | |
| 21~25 | | | | | 1 | 1 | 12 | 15 | | 2 | | | 26 | 27 | |
| 26~30 | | | | | 1 | | 8 | 6 | 1 | | 2 | 1 | 25 | 13 | □ 28才分裂病(男) ○ 29才女分裂病 |
| 31~35 | 7 | 3 | | | | | 12 | 6 | 1 | 1 | 6 | 3 | 21 | 15 | ◎ 34才女病的人格 |
| 36~40 | 5 | 4 | | 1 | | | 4 | 5 | | | 2 | 3 | 18 | 21 | □ 37才男分裂病 ○ 38才女 " |
| 41~45 | 2 | | 1 | 1 | | | △3 | 1 | | | 6 | 11 | 13 | 8 | △ 42才男魯鈍に近し |
| 46~50 | | 1 | 2 | 1 | | | △3 | 2 | | | 3 | 6 | 6 | 3 | △ 46才男魯鈍に近し ○ 49才女分裂病(他村に嫁ぐ) |
| 51~55 | | | 1 | 5 | | | | 2 | | | 13 | 5 | 1 | 4 | □ 54才男分裂病 |
| 56~60 | | | 4 | ◎9 | | | 1 | | | | 7 | 4 | △ 2 | | △ 56才男魯鈍に近し ◎ 57才女分裂病性格(死亡) |
| 61以上 | | | 14 | 5 | | | | | | | 17 | 17 | | | |
| 計 | 14 | 8 | 22 | 22 | 40 | 30 | 66 | 55 | 34 | 56 | 67 | 54 | 186 | 158 | |

第 18 表 家 島 町 真 浦

| 年 令 | 発端者 | | 両 親 | | 子 | | 同 胞 | | 同胞の子 | | 父母の同胞 | | 従同胞 | | 患 者 |
|-------|--------------------------|---|-----|----|----|----|-----|---------------------|------|---------------------|---------------------|----------------------------------|----------------------|----------------------|---|
| | 男 | 女 | 父 | 母 | 男 | 女 | 男 | 女 | 甥 | 姪 | 伯父 叔父 | 伯母 叔母 | 男 | 女 | |
| 0才~5才 | | | | | 18 | 19 | 4 | 4 | 35 | 30 | 8 | 5 | 19 | 24 | |
| 6~10 | | | | | 11 | 14 | | | 25 | 18 | 1 | 1 | 6 | 4 | ◇ 10才男啞者 |
| 11~15 | | | | | 22 | 10 | 4 | 1 | 20 | 22 | 1 | 1 | 13 | 12 | |
| 16~20 | | | | | 7 | 5 | 4 | | 15 | 15 | 2 | 3 | 15 | 17 | |
| 21~25 | | | | | 1 | 2 | 9 | 7 | ◇10 | 9 | 2 | 2 | 21 | 15 | ◇ 22才男分裂病 |
| 26~30 | | | | | | | 7 | 8 | 3 | ● ² 4 | 1 | 2 | 25 | ● ¹ 22 | ● ¹ 26才女分裂病(死亡) ● ² 28才女分裂病 |
| 31~35 | 2 | 3 | | | | | 13 | 8 | 2 | 1 | 1 | 1 | 33 | 35 | |
| 36~40 | ◇ ¹ 2 8 | 3 | | | | | 2 | 13 | | | 8 | | ◇ ³ 31 | 38 | ◇ ¹ 39才男病的人格 ◇ ² 40才男 " ◇ ³ 40才男 " |
| 41~45 | 4 | 2 | | 1 | | | 8 | 7 | | | 2 | 1 | ◇39 | 30 | ◇ 44才男 " |
| 46~50 | 2 | 1 | 3 | | | | 2 | ● ¹ 8 | | | 3 | 4 | 18 | ● ² 22 | ● ¹ 46才女分裂病 ● ² 48才女 " |
| 51~55 | | | 1 | | | | | 5 | | | 12 | 2 | 13 | 3 | |
| 56~60 | | | | 5 | | | | 1 | | | 9 | 3 | 2 | 2 | |
| 61以上 | | | | ◎ | | | | | | | ◇ ³ ● | ◇ ¹ ◇ ² | | | ◇ ¹ 61才男病的人格 ◇ ² 63才男 " ◇ ³ 73才男 " ◎ 62才女 " (死亡) ● 72才女分裂病 |
| 計 | 17 | 9 | 26 | 26 | 59 | 50 | 53 | 62 | 110 | 99 | 104 | 55 | 237 | 231 | |

2が発見された。その補正頻度は父母の同胞では、患者1、閏係数131、補正頻度0.76% 従同胞では患者2、閏係数264、補正頻度0.75% 同胞では患者1、閏係数66.5、補正頻度1.50%である。尤もこれらの値は発端者の数の少い為の偶然を考慮しなければならないであらうが、発端者の父母の同胞に4.0%と云う大きな値の出るのは宮浦部落に全般として分裂病負因の濃厚だと云うことを推定せしめる。つまり宮浦部落民の祖先たる覚田僧都、高島秀景一党に既に濃厚な分裂病負因が存在していたのであり、それが部落内結婚により保持累積されているのであらう。

坊勢の如き近親婚地域に分裂病は寧ろ少く

非近親婚地域たる宮浦にかくの如き高い分裂病頻度を来している事実がこう云う推定を更に有力ならしめるものと思う。又前論文で述べておいた如く近親婚が劣性遺伝病の累積原因たり得ないという私の所論とも合致するのである。

(ロ)、癲癇の頻度の高いことが坊勢の特徴であることは既に前論文で触れておいた。ところが、宮浦、真浦は何れも0.3%程度で本邦地域平均値域内にある。それは癲癇に関しては両部落民の由来が新らしく、いわば本土住民の成員を代表するものと云えるようである。

終りに臨み本研究に対し懇篤な御指導を賜った林前教授並に御校閲を頂いた藤原教授に深謝する。

文 献

1) 内村外七氏：精神経誌，44卷，(昭和15).
 2) 向笠. 岡野. 古賀：民族衛生，9卷，(昭和16).
 3) 平塚. 野村：同上.
 4) 津川其他：精神経誌，46卷，(昭和17).

5) 萩野. 長尾：精神経誌，47卷，(昭和18).
 6) 内村：精神経誌，47卷，(昭和18).
 7) 秋元其他：精神経誌，47卷，(昭和18).